# 音楽コンクール

昭和五十五年度　六年　女児

九月二十一日、浜田小学校で「ＹＢＣ」子ども音楽コンクール」があった。私と五人の友達はこの日のためだけに練習をしてきたのだ。私達は重唱の部に出るのだ。私は四組の美佳さんと組むことになっている。二十日も音楽室で最後の練習をした。

「どんな服着てくる。ふだん着、それともいい服。」私達がおしゃべりしていると、

「いい服着てきて、歌へだだば、他の学校から笑わいっぞ。」と、栄一先生から言われた。コンクールが明日だというのに、みんなドキドキしないのかなあと思った。それでみんなに聞いてみた。私の思った通り、みんなもドキドキするという。

夜は、ノドによいかりん酒を飲んでふとんにはいった。今日は早くねなきゃと思いながらもなかなかねれない。」

二十一日は朝五時ごろに起きてしまった。父や母がまだねむっているので、もういちどねなおした。七時ごろ母にゆり起こされた。いよいよコンクールの日がきたのだ。心ぞうがドキドキしてきた。朝ごはんもろくに食べられなかった。

八時十五分、地下道の入口で庄司さん、さなえちゃんと待ち合わせることにしていた。若浜小の所で、美佳さん、ひろみさん、幸子さん達にあったので、みんなそろって浜田小に向かった。栄一先生はまだきていなかった。

私達は二人一組になって練習して待つことにした。歌っていると、門をはいる人達がじろじろと見ていくが、そんなことはおかまいなしに声をはりあげて歌った。だいぶ待った。やっとのことで栄一先生が来た。講堂に入りだんの上でリハーサルを二回やった。

私達が歌うのは、「勇気一つを友にして」だ。いよいよ開演だ。私達が一番初めに歌うんだからたまったもんじゃない。早く終わりたいと思っているところへ母が来た。こりゃあ、よけい都合が悪くなったと思った。

「へだだけの、なしてもっと大っきロあがねな。」とか言われるといやだからだ。

そんなことを考えているうちに私達が歌う番になって

しまった。ＹＢＣラジオのきれいな女のアナウンサーがきれいな声で、
「若浜小学校六年、金野寿子さん、斎藤美佳さん。」とし
ょう介した。返事はしたが、あとはなにがなんだかわからず、だんの上にあがった。栄一先生のピアノが始まると、むちゅうで歌った。歌い終わったとき、全身から力がぬけていくようだった。栄一先生もピアノをひく指がふるえているようだった。
全員が歌い終わり、ひかえ室にもどった。後ろにいる母をそうっと見てみた。気むずかしい顔をしていた。おこっているのか、わらっているのか、わからないような顔だった。
あとはのろのろと時間が過ぎていった。全員が歌い終わりお昼になった。弁当を持ってきていない私達は、近くのそば屋で栄一先生からおごってもらった。二時には結果の発表がある。あわてて食べ、急いで浜田小にもどった。
いよいよ発表だ。賞にはいるかどうか、とても心配だ。
しんさ員の先生から入賞者の名ぼをもらったアナウンサーが大きな声で発表した。
「佳良賞、若浜小学校六年、金野寿子さん、斎藤美佳さ
ん。」その声を聞いたとたん。今までギュッとにぎっていた手から、すうっと力がめけていくのがわかった。今までのきんちょうがとけうれしさがこみあげてきた。
「やったあ。入賞だ。」庄司さん達も全員それぞれの賞をもらうことができた。みんなは手をとりあってとびあがった。栄一先生もうれしそうに、にこにこしていた。
「お母さん、賞もらったよ。」家に帰るなり、大きな声で報告した。
「寿子が、あったげ歌じょうずだどはしらねけ。」と父は、ほめてくれた。会場ではみなかったけれど、父も母と同じように心配して見に来てくれていたんだなあと、初めて気づいた。
「お父さんありがとう。」私は心の中でつぶやいた。